

# 晩年の高野素十

—復刊『芹』時代—

倉 田 紘 文

(一) はじめに

対象への凝視に徹し、『ホトトギス』客観写生派の宿将として知られた鈴木花蓑の

頂上や淋しき天と秋燕と 花 蓑

の句を病床に思い浮かべながら、高野素十は他界した。昭和五十一年十月四日朝五時であった。

主宰誌復刊『芹』の昭和五十一年七月号の近詠に

天の川西へ流れてとゞまらず 素 十  
わが星のいづくにあるや天の川 同

の句を発表しているが、これはその師高浜虚子の

虚子一人銀河と共に西へ行く 虚 子  
われの星燃えてをるなり星月夜 同

の句を心に置いての、辞世の挨拶であったに違いない。

この素十の最晩年の句に対して、「俳句の軽みと遊びと虚構」〈座談会〉（『俳句』昭和五十二年五月号—角川書店—）の中で

森 澄雄「素十さんの句はもちろん写生の極限としてぼくは非常に感心する句がありますが、最後の一句に関する限りは『わが星のいづくにあるや天の川』というのは写生を離れて少し淡い」

山本健吉「主観的じゃないですか」

森 澄雄「非常に主観的……。老境になるに従って、句が淡

くなくて、なんというのか写生を離れてだんだん一種の抒情派になってしまっているところがありますね」

という意見が述べられている。ところで、その座談会での発言者の一人である山本健吉氏の曾ての素十評には

声刈の天を仰いで梳る 素十

作者の魂は写生の鬼と化している。素十には動詞現在形で結んだ句に秀作が多い。この形は説明的、散文的になりやすいが、それを防いでいるものは彼の凝視による単純化の至芸だ。抒情を拒否して、彼は抒情を獲得している。「素十の成功した句は他の誰よりも俳句という文学ジャンルの固有の方法をつかんでおり、いわばその俳句そのものと言ふべきであつて、現代俳句の大高峰をなしている。」<sup>注①</sup>

と書かれているのだが、これは没主観の客観写生俳人としての素十に対する賛辞であつた。この一文と、先きの座談会での素十評とは明らかに大きな開きがある。

そこでこの小論では、「その句風は客観写生に徹し、虚子の唱導する花鳥諷詠の忠実な実践者」と言われて来た素十の作品が、晩年どのような傾向であつたかを、森氏の「写生を離れてだんだん一種の抒情派になってしまっている」の指摘に沿って考察してみたいと思う。

## (二) 「芹」時代

素十が「俳句の道は ただ これ 写生。これ たゞ 写生。」と主張して俳誌「芹」を創刊したのは昭和三十三年五月である。その号の巻頭言に

私は虚子先生から写生俳句といふものを教へられました。たゞ一筋に写生するといふ教へを受けました。そうしてその通りに実行し、勉強して参りました。之が私の俳句であります。

とある。そして、それを「写生は志向であり実践である」と<sup>注②</sup>言い、常に写生を標榜して来たのである。だが、昭和四十五年五月十二日に素十は自宅にて発病、同十九日に入院し、「芹」は同年九月号（第十四巻五号——通刊一六一号）で休刊となつた。その最終号に

虚子先生の何百分の一——それが虚子先生から私に伝つた全部であると思うのであるが——その全部を諸君に私意を交えずに、全部を伝え終つた感じである。私に残っているものは何もない。そう考える私の心は満足であり愉快である。」

と書き、その俳句作家としての立場に一応の終止符を打った。この二つの文章には、その師虚子の俳論の継承、実践の意識がはっきりと語られている。

この『芹』時代の素十の俳句観についてはここでは省略するが、それを大きくまとめれば「すぐれた作品を成すためには、作者の清く高い心が要求される。その清く高い作者の心は、深い写生により養われる。そしてその写生の深さは又作者の心の深さによるのである。それは結局、写生のための心の深さであり、心の深さのための写生なのである。」<sup>注⑤</sup>と

いうことになろう。ここで素十が「写生」と「心」とを結びつけたことには大きな意味がある。昭和三年十一月号の『ホトトギス』誌の「秋桜子と素十」の一文で、虚子は俳句の二つの異なる傾向を説明し、その写生態度を「主観的空想的」なる秋桜子と、「客観的現実的」なる素十として述べている。そして、その真実性の強さから素十の在り方を肯定し、「厳密なる意味に於ける写生と云ふ言葉はこの素十君の句の如きに当てはまるべきものと思ふ」と結論づけたのである。

それに対して秋桜子は「若しも『自然の真』を究めて俳句の能事終れりとするならば、俳人は書齋の勉強を要することなく、心の涵養を大切にすることもない」<sup>注⑥</sup>（傍点筆者）として、『ホトトギス』を去って行った。その当時論することの少なかつた素十の実践を通しての答えが、この『芹』時代と

言えるのである。

昭和初頭「甘草の芽のとび／＼のひとならび」等の句により、反対派からはいわゆる「草の芽俳句」と言われ、その無内容にも受けとれる外形的な些末さを強く非難された素十が、写生によってなる作品に心の裏付けをここで説いているのである。

### (三) 素十における「晩年」

さて、心の涵養を客観写生の根底に置いた素十の晩年の句について述べる前に、素十の晩年とはいつからを指すのかということをはっきりさせておく必要がある。

私は、前項で述べた「……私に残っているものは何もない」という言葉と共に『芹』を休刊した昭和四十五年九月号を以て区切りたいと思う。そのことは又、翌昭和四十六年の復刊『芹』（六月号）を以て始まるということにもなる。即ち

『芹』の復刊は或いは短い命を更に短くする様な多忙さと心労さとの加重になると考えられるであろう。しかし凡俗の身の私には、時として物を云って見たくなったり何かと書いてみたくなったり、又弟子達の云うことを聞いて見たくなったりすることがあるのである。そう云う意味から『芹』を復刊することにした」<sup>注⑦</sup>

時点である。これを詳しく言えば、休刊と復刊との間に約八ヶ月の空白がある。その前後の病状と作品発表を示せば次の

昭和46年						昭和45年						年		
6	5	4	3	2	1	12	11	10	9	8	7	6	5	月
	11	9	13	10	11	3	7	3	12	10	12	9	6	作句数
	復刊「芹」 11月号6句 同右 5句	復刊「芹」 10月号8句 同右 1句	復刊「芹」 9月号11句 同右 2句	復刊「芹」 8月号 同右	復刊「芹」 7月号 同右	同右	同右	同右	復刊「芹」 6月号	「芹」 9月号 同右	「芹」 9月号5句 同右 7句	同右	「芹」 8月号	発表誌
	復刊「芹」六月号発行	復刊「芹」第一号（六月） 編集完了	28日					21日 退院	「芹」9月号にて休刊 同右	同病院にて静養中 同右	27日 24日 21日 退院 「芹」9月号編集完了 愛知県南知多「南知多病院」入院	同病院入院中 退院	19日 12日 発病 京都第一日赤へ入院	病状及び事項

如くである。

上の表でわかるように、「芹」九月号は事実上昭和四十五年八月の作品（最後の作品は八月二十九日付）までが載っており、翌月の九月からの作品（最初の作品は九月六日付）は復刊「芹」六月号掲載となっている。

従って素十の「晩年」をこの稿においては一応形式的に、昭和四十五年九月から昭和五十一年十月四日の逝去の日までの、約六年間とする。

#### （四）復刊「芹」にみる素十の俳論

そこでまず晩年の俳句観を復刊「芹」の「句評」の中から探ってみることにしよう。

蚕の上へお蚕重なりてお蚕眠る

「蚕の上へ蚕の重なりて」とすれば写生ではあるがその蚕に對する情が薄い様に思う。「蚕の上へお蚕重なりて」とした為に蚕飼いの人の蚕に對する情が出ておつて、本当の意味の写生句となつたものと云うことが出来る。（復刊

「芹」昭和47年11月号）

即ち、対象に對しての作者の情の導入である。これは（二）の項で述べた「作者の心の涵養を写生俳句に求めた」ことを踏まえての言葉であろう。だが「……情が出ておつて、本当の意味の写生句となつた」というところに、「芹」時代との

わずかながら違いを認めることが出来る。そのことは次の句評

三寒を四温を如何に過されし

俳句と云つても、写生と云つても要するところ、その根本はその人の心によるものである。その心の至らない句、又はその心持の出で、おらぬ句は良い俳句とは申し難いのである。(復刊『芹』昭和50年6月号)

の中の「その心持の出で、おらぬ句は良い俳句とは申し難い」というところにも見ることが出来るのである。

「芹」の時代においては、例えば

岩の上に打ちあげられしがうなかな

岩と寄居虫、波によって岩の上に打ち上げられた寄居虫。ただそれ丈の自然である。それだけの自然をそのままに写生してこのような美しい一句とした。平明なると称する句が自然の真の姿をいきいきと伝えているかどうかということは、理屈で云つても判るものではなく、それは作者の心の問題となってくるのである。(『芹』昭和44年12月号)

木虹豆の枯れ細りたる莢を垂れ

自然の真の姿だけでいい。その自然の姿が心にひびいたも

の、それが詩になり、又俳句になると思うのである。

(『芹』昭和45年3月号)

の如く、「自然をそのままに写生して」、又は「自然の真の姿だけでいい」というところからもわかるように、「心」の大切さに言及しながらも、なお一句の表現においては「情」の表出はあくまでも押えていた。それはいみじくも、山本健吉氏のいう「抒情を拒否して彼は抒情を獲得している」ことがまだ生きつづけていたのであった。

そのことから言えば、「心の涵養」を説いた「芹」の時代より、更に晩年は「感情移入」の一面も持ち合わせて来たことになる。だからそれは又、森澄雄氏の「老境になるに従って、句が淡くなつて、写生を離れてだんだん一種の抒情派になつてしまつている」という線上に乗ることもなりかねないのである。

しかし、素十はそのように俳句への感情移入(感情を表わす語を用いるということだけでなく、心持(愛情)を対象に込めて詠い上げる)を説きながらも、やはりその根底には

海苔礁に一つの波のひろごりし

この句は客観写生から、足を踏み出すことなく、優れた句となつておる。(復刊『芹』昭和47年2月号)

山茶花にほつほつ花や苗木木

難しい主観など用いず、ありのままの景色を素直に描いていることがよい。(復刊「芹」昭和50年1月号)

次の田に蛙の影ある冬田かな

純粹な写生句であろう。唯あるがままの自然の風影である。久し振りにこう云う純客観句に巡り会ったような気がする。こう云う句は何よりも大切にしておきたい。(復刊「芹」昭和51年2月号)

等の純客観俳句への志向が依然として強く在るのである。復刊「芹」昭和五十年一月号の後記に、「『芹』の読者、及作者諸君は客観写生を重んじて、佳句を作って貰いたいものです。」とあることからしても、その主張の変らぬ強さがうかがえる。

以上のことから導き出される、晩年の素十が求めた俳句は対象に作者の心が十分に注ぎ込まれたところの写生俳句ということになろう。

#### (五) 晩年の素十俳句

昭和四十五年五月十二日に発病した時、素十は「病中吟詠」として

蘭帽子の主の曰く万事了 素十

夏の人空手来りて空手去る 同

という句を作っている。この句でいう「蘭帽子の主」も「夏の人」も勿論素十自身のことであろうが、この客観的描写とこの二句に表わされた心の潔さは、共に写生派俳人としての素十の面目をいかに発揮していると言える。そしてそれはまさに正岡子規の絶句

糸瓜咲いて痰のつまりし仏かな 子規

のあの自己客観視にも匹敵すると言つてよからう。

しかしその後、素十はこの「万事了」「空手去る」の境地をぬけて、病の快復と共に再び作句活動を始めた。そこで、その晩年の俳句をここでは考察してみることにする。

復刊「芹」(昭和四十六年——昭和五十二年十一月号)通刊六十六号に、素十が「近詠」として発表した句は、全部で八百二十一句である。<sup>注⑩</sup>

それ等の句の表現上の傾向を、初期の「初鴉」から順々に他の句集の句と比較してみると次のようになる。

俳句における数詞の使用率の高さは、「真实性」と強く結びつき、特にその数詞「一」については「単純化」(写生俳句における省略技法)への現われであり、素十俳句の「簡索性」と結びつくのである。<sup>注⑪</sup>(この論理の過程は拙稿「初鴉」——その背後にあるもの——に詳述してあるので参照されたい)。

表 2

復刊「芹」	「芹」	野 花 集	雪 片	初 鴉	句集 / 項目	
					句数	数詞句
821	155	398	406	654	句数	「一」句
199	57	83	78	91	句数	「二」句
24	37	21	17	14	%	
86	23	47	36	56	句数	
10.4	14.8	11.8	7.8	8.5	%	

そこでこの表二を分析すると、「初鴉」の頃から時を追って増加していた数詞の使用率が、復刊「芹」には減少して来ている。即ち「真实性」「單純化」「簡索性」を特徴とした写生俳句のその深化現象が、行くところまで行って、今は後退をはじめたことを意味している。

だが、減少しているとは言え、そこにはやはり高い数値を見ることが出来るのであり、凝視するその態度においていささかの弱まりはあるものの、写生への志向はなお依然として強いことを示している。

又、語句及び言葉をくり返すということは、素材の省略であり、かつ対象把握の視覚的、聴覚的強調である。その観点

表 3

復刊「芹」	「芹」	野 花 集	雪 片	初 鴉	句集 / 項目	
					句数	反復語
821	155	398	406	654	句数	反復語
12	13	9	6	8	言葉	語句
70	12	33	24	26	計	
82	25	42	30	34	計	
10.0	16.1	10.5	6.1	5.1	%	

から表三を見れば、これも又数詞使用の場合と同じく、その率は晩年には低下している。即ち、言葉をつたみかけて、一方へ、更には一点へと迫ってゆくその集中力がや、弱くなつたと見ることが出来る。しかしこれも、初期の「初鴉」や「雪片」に比して決して低い率ではない。

つまり両表とも、病気で倒れるまでの「芹」時代の素十の作品が、それぞれのピークであったのに対して、病後の復刊「芹」において、その傾向が逆に向きはじめていたのである。かつて「自己を投げだして対象に迫る。その意味で凝視の俳人と称すべきであろう。いや、それ以上に執念の作家と呼ぶべきであろう。」<sup>註⑩</sup>と言われた素十の、写生派としての「凝視」

とその「執念」が、句の表現において確かに逆行しはじめたのである。

そして、その逆行は又、形式的な表現技法だけでなく、言葉の上での感情表現にも直結していると思われる。

【初鶉】において、主観的かつ感情的な表現をした句は

雷魚殖ゆ公魚などは悲しからん

子の中の愛憎淋し天瓜粉

等、「悲し」……四句、「淋し」……一句、「なつかし」……三句、「うれし」……一句で、わずかに八句であった。それが復刊『芹』になると

かなしけれ日脚ののぶといふことも

鴨池に今日も驚来るとは悲し

等「悲し」の句が八句、

衣被沢山あげて我さびし

等「さびし」の句が四句、

雪国に住む誰彼のなつかしや  
ふるさとの畦木の茂りなつかしや

等「なつかし」の句が十五句

秋晴の海広くして妻恋し

等「恋し」の句が五句、他に「名残惜し」四句、「別れ惜し」三句、「憂ふ」三句、「愁い」二句、「うれし」「をかし」「あはれ」が各一句、計四十七句も直接的に感情を表現した句がある。

これを率で表わせれば約五、七％であり、【初鶉】のそれが一、三％であったことに比べれば、著しい増加ということになる。

ここには明らかに客観から主観へという一つの措辞の変化を指摘することが出来る。そしてそのことが、森氏の「抒情派になってしまっている」ということにもなるのであり、又前項で結論づけた晩年の素十の俳句観である「対象に作者の心が十分に注ぎ込まれた句」でもあるのである。

勿論晩年の句が全てこういう傾向にあったのではなく

右に解け左にとけて花芒

蝌蚪二三をりをり水の深きより

のような純客観写生俳句もある。そしてそれ等の句がやはり「素十が自己の環境として小動物、植物そのものに目を注ぎ、その視覚的な面のみ自己の文学の環境としてしまふ、そこに形成されたのが人間感情を拒否し切った作品<sup>注③</sup>」であり、晩年の素十になお燃えつつける客観志向への一面がそこに表われている。

だが結局は「対象に対する情が出ておって本当の意味の写

生句と言える」、或いは「その心の至らない句、又はその心持の出でおらぬ句は良い俳句とは申し難い」と言い、感情的な措辞をも避けなかつたその実作をもって、晩年の素十の傾向と考えてさしつかえないと思う。

最近、後期の素十俳句について書かれた杉本零氏の「我々はヨットが、帆と舵の向きをリンクさせ、ジグザグ航法によって風向きを逆行する事の可能な事を知っている。此場合舵は赴かんとする方向とは別の向きへ旋される。素十に典型を見る客観写生なる技法は情と逆方向に心の舵を旋して却つて情の本源へ追るものと言える」<sup>注⑩</sup>は、初期の素十俳句に付した山本健吉氏の「抒情を拒否して抒情を獲得する」の延長であらうが、それはもはや晩年の素十にはあてはまらないのではなからうか。

(六) おわりに

ところで、晩年の素十俳句の根底に流れているものは一体何であらうか。

以前私は「初鵜」の句の本質を「生命の躍動」<sup>注⑪</sup>と論じた。そしてこの晩年の句においては「生の悲しみ」とでも言うべき、素十の心の悲しみを讀みとることが出来る。

ここではその「悲しみ」をひきおこさせる原因をいくつか上げてみよう。

まず第一に、次々と先きだつてゆく友の死があげられる。

○ 里石見舞 (復刊『芹』 46・11)

秋淋し 君一人の病めば尚

「君の死ぬのは私が死んでからにしてくれ。そうでない」と、私は淋しくて仕方ないから」(復刊『芹』

47・3)

○ 石田敬二逝くの訃報あり(復刊『芹』47・2)

寒燈の下に老いたる我は泣く

○ 悼 野村くに女 (復刊『芹』48・2)

春寒ききのふと聞きしかなしけれ

○ 中田みづほ追悼 (復刊『芹』50・8)

盆過ぎの一人のこりて如何にせん

そして第二に、四十七年十月十五日に京都山科から神奈川県相模原市へ転居したこと

○ 復刊『芹』47・7

黄高蒲を見てあることも別れ惜し

緑して永観堂も別れ惜し

○ 復刊『芹』47・12

寝待月京恋ふ心なしとせず

○ 復刊「芹」48・6

相模野にさつき咲かせてや、淋し

○ 復刊「芹」48・9

夏草の相模ヶ原に住むは爰し

第三には、老いて病む身の悲しさである。

○ 平野六角牛病み入院（復刊「芹」47・8）

病む人の暑に耐ゆるとか悲しけり

病む人の暑に耐ゆるとや我も亦

○ 復刊「芹」48・7

明易しここに一人の老措大

○ 復刊「芹」49・10

帷子の膝うすうすと我身かな

これ等は皆、大病を得「藺帽子の主の曰く万事了」と自覚し、更には「夏の人空手来りて空手去る」と悟りの境にあつた作者が、再び歩み帰つて来た現実世界での、一人の人間としての悲しみである。

悲しみのあり枯山に來りけり

と復刊「芹」48・3にあるが、この句の「枯山」の淋しきにも似た悲しみである。それは余後の身の生きることの悲しみである。

だから「頂上や淋しき天と秋燕と」と、敬愛する先輩花叢の句を病床で思い浮かべたのも、又「わが星のいづくにありや天の川」と詠んで亡き師へ心を馳せたのも、「生」の悲しみを通して「死」への思いを述べたのであつたらう。

そのおさえ難き「悲しみ」が、素十のこれまでの「抒情拒否」の厚い壁を打ち破つて、句に表われ、言葉となつて出て来たのである。そして、その悲しみについては、「芸というものはうしろに悲しみがなければならぬ。うしろに悲しみのない芸は本當の芸と云うことは出来ないだろう」という棟方志巧の言葉に深く肯いてゐるのである。悲しみを悲しみとして受け止めつつ、そこに一つの美をみつめようとしているのである。

だが、ふりかえってみれば、「初鴉」における「生命の躍動」というのも

青みどろもたげてかなし菖蒲の芽

囀鴨雌をつつきぬ悲しけれ

雷魚殖ゆ公魚などは悲しからん

の如く、実は描かれた一木一草一鳥一虫に素十の「愛」が籠められ、「情」が注がれて、その結果として対象の心と素十

の心が「生命」を共有する時、即ちその生命の根源に互いに触れた時の哀しみにほかならなかつた。ただその「情」が「感情を拒否し、自然を視覚的に描写する作風も素十の自覚的なものであつた」ために、これまで強く深く「客観写生」という粹の中に閉じ込められていただけなのであつた。もともと素十は「情の人」であつたのだ。

だから「芹」の時代には、その隠された「情」をより純粹なるものにするための「心の涵養」を説いたのであり、そしてその澄んだ「情」が晩年になって「生きる」という人間本来の悲しみに誘発されて表白されたのである。

晩年のこの「心の表白」が素十俳句にとつてはたして進歩発展なのか、それとも後退なのかは、又別の機に考察することにして、本稿においては晩年の傾向を述べるに止めておくことにする。

注①山本健吉『現代俳句』（角川書店刊 S 39）

②『俳階大辞典』（明治書院）による。

③高野素十「写生は実践」（『芹』S 34・4月号）

④拙稿「子規と素十」（『別府大國語国文』第十三号S 46）に詳述。

⑤注④の十二ページ参照

⑥水原秋桜子「自然の真と文芸上の真」（『馬酔木』S 6・10月号）

⑦「自然の姿、自然の変化、それ等に目をとめる写生というものはいい句をもちとらすというだけでなく、人間を陶冶する」（『芹』S 32 10月号）

「俗の心でそれを詠えば俗なる句となり、俗を離れた心を以て詠えば、自然そのものの本来の姿になるのである。要はその作者の心そのものなのである」（『芹』S 43・7月号）等

⑧高野素十「要心」（復刊『芹』S 46・7月号）

⑨他に①発病の時点……昭和四十五年五月十二日 ②『芹』復刊の月……昭和四十六年六月、とする考え方もあると思う。

※明治書院刊『素十全集』（全四巻）には昭和四十五年八月の作品まで収録。又、永田書房刊『素十全集』（別巻）は昭和四十五年九月——『芹』復刊号掲載分からである。

⑩実際に発表されたのは八百二十二句だが「ある寺の添水の音を今思ふ」の句は復刊『芹』S 49・9月号、同10月号と二回に重複故、10月号分を削除する。

⑪拙稿「初鵝」（『別府大國語国文』第十二号S 45）参照。

⑫中島斌雄『現代俳句全講』（学燈社刊S 50）

⑬松井利彦『昭和俳句の研究』（桜楓社刊S 45）

⑭杉本 零「高野素十」——現代俳人の主題と方法——（『国文学』S 51・2月号）

⑮注①に同じ

⑯「棟方志巧さん」（復刊『芹』S 48・12月号）

⑰「素十俳句の意味」注⑬に同じ。